鈴鹿の風

すずかのかぜ

VOL. 34

独立行政法人国立病院機構鈴鹿病院広報誌

挨拶に代えて　平成最後の夏に思うこと
院長　久留　聡

新任医師の紹介
看護部だより
療育指導室からのお知らせ
医学コラム「難病拠点病院と神経難病」
名誉院長の部屋「杖つきツタン」
地域医療連携室だより
昭和・平成スポーツオタクコラム―番外編―

重症心身障がい児（者）病棟の看護師

挨拶に代えて 平成最後の夏に思う事

独立行政法人国立病院機構鈴鹿病院 院長　久留（くる）　聡（さとし）

この号が出るころには少しは涼しくなっていると思いますが、今年の夏は殺人的ともいえる猛暑でした。平成も残す所あと半年余りとなりましたが、皆様にとって「平成」とはどのような時代だったでしょうか？

思えば平成が始まったのはバブル景気絶頂の頃でした。額に汗して働くのはもう古いとばかりに人々はマネーゲームに狂奔していました。当時大学生の私は、そんな風潮に当惑し悩み多き日々を送っていました。まだインターネットもSNSもない時代でしたから、同じような悩みや違和感を抱く若者が少なくないことは知る由もありませんでした。そんな悩みにつけ込むように、「金儲けだけが生きる目的じゃない、人生について大いに語り合おう」、「ヨガで精神を高めてみないか、神秘体験もできるよ」、「君には凄い素質があるよ、前世は織田信長かも知れない」、などと甘言を弄する怪しげなカルト宗教の魔の手が、迷える若者を狙っていたのです。残念なことに当時はカルトという言葉さえあまり知られていない、今から思えば随分と能天気な時代でした。同じ頃、横浜の弁護士一家が突然行方不明となり、タクシーや駅にはその件に関する情報を求めるビラをよく見かけました。何とも不気味で不可解な事件でした。一見平穏な日本社会に潜む邪悪な影が垣間見えた瞬間だったのですが、すぐに事件は忘れ去られました。我々は、あまりにも無防備だったのかも知れません。

平成６年の夏は今年同様の酷暑でしたが、長野県の松本で毒ガスがまかれ、多数の死傷者が出るという未曽有の事件が発生しました。被害者の中には信州大学の医学部生も含まれていました。最初に強く疑われた人物は後に無実であることが分かるのですが、そんな初動捜査の混乱もあって、真相が究明されないままいたずらに時間が過ぎてしまいました。明くる平成７年の２月には、東京の目黒公証役場の事務長が白昼に路上で拉致されるという、これまたとんでもない事件が起きます。私はこのニュースを新幹線の掲示テロップで知ったのですが、その一報には「宗教団体が関与か？」というコメントがつけられていたのを覚えています。

そして遂に３月20日朝、首都東京の地下鉄に猛毒のサリンがバラ撒かれるという前代未聞の無差別テロが勃発するのです。その後教団への強制捜査をきっかけに、堰をきったように一連の事件の報道が世に溢れかえりました。多くの高学歴で優秀なエリート信者が兇悪事件に関わっていたことが明らかとなり、その中には本来人命を救うべき医師も含まれていたことに、人々は驚愕を隠せませんでした。バブル期の異常な世相に取り残され、自分の居場所を見つけられずにいた同世代のエリート達が、そのあり余る才能を間違った方向に利用され、結果的に取り返しのつかない大きな罪を犯すことになってしまったのです。そして平成最後の夏、彼らは刑場の露と消えたのでした。

新任医師の紹介

introduce our new doctor

牧江 俊雄

内科医長

高校卒業までを御在所岳の麓を駈け廻っていましたが、30年近くを北は北海道から南は九州まで、さまざまな地域を転々としました。医学部には北大理学部を経て、再入学で山口大に入学しました。その後は、九大心療内科に入局したものの総合ローテの研修医時代に出会った薬害AIDS患者の影響を受け、医局とは関係なくNYでのAIDS研修の話をつけて出かけてしまいました。その後も、日赤で総合診療、その他にも呼吸器、感染症の臨床を経験する一方で、医療情報部でパソコンと向き合い医療統計を学んだり、PMDAで新薬の申請書類と向き合ったり、検疫所のHPからの情報発信で石頭の厚労省の役人と向き合ったりと、さまざまな経験をしました。それでも、いつも根っこには、当時は治療法のなかったAIDS患者との向き合い方への問いがありました。その点では、鈴鹿病院の難病患者に通じるところがあります。ここの患者は、希望の光を見せることが非常に難しく、強がりながらも、自らが表現できる単語の乏しさに頭を抱える日々を過ごしています。ここまで、数学統計、機器、行政から、心理に至るまで垣根を持たず、必要性を感じるままに行動してきました。ここでも、いろんな職種の方に無遠慮に接していくと思います。煩わしいこともあるかもしれませんが、よろしくお願いします。

Let´s study the medical !!

夏季筋セミナーを開催しました

８月21日（火）に筋疾患に興味のある若手脳神経内科医を対象とした筋セミナーを当院で開催しました。久留院長をはじめとする当院脳神経内科医より筋疾患の呼吸管理や分子遺伝学、筋病理などについてレクチャーをおこないました。

本セミナーを通じて進行性筋ジストロフィーをはじめとする多くの筋疾患の診療をおこなっている当院で、急性期の病院では診療する機会の少ない筋疾患についての知識を深めました。

講義をおこなう南山臨床研究部長

看護部だより

東２階病棟看護師長　前田 仁子

当病棟は、重症心身障がい児（者）病棟として、医療ケアを必要とする、幅広い年齢層の患者さんの入院を受け入れさせて頂いております。東２階病棟の多くの患者さんは、自分で動くことが難しいため、日常生活のほとんどに介助が必要となります。そのため、看護師をはじめ療養介助員や保育士、児童指導員と一丸となって、患者さん個々にあった看護や介護を考え、安全にまた安楽に過ごして頂けるように取り組んでおります。食事介助が必要な患者さんに、医師、言語聴覚士とともに摂食機能を評価しながら、患者さんにあった姿勢や食事形態を検討し、できるだけ経口摂取で、楽しく食事ができるように関わっております。呼吸障害のある患者さんには、安定した呼吸となるよう病棟看護師の呼吸療法士を中心に、院内の呼吸療法委員会で患者さんの検討を行い、看護師以外の多職種からのサポートが受けられる体制も整えています。医療・看護のサポートとともに療育指導室と連携しながら、日々の生活の中に季節行事や療育活動を通して、楽しみながら過ごして頂けようにも取り組んでいます。療育活動の中には、院外レクリエーションもあり、院内では経験できないことも取り入れ、普段見せてもらえないような嬉しそうな表情を見せてもらえることもあり、看護師の励みとなります。重症心身障がい児（者）の患者さんは、ご自分の思いを言葉で表現されることが難しいため、患者さんの快・不快を感じ取り、いつもと違う様子はないか、看護師の患者さんを看る力を活かし、家族の方にも安心して頂けるよう看護を行い、よりよい看護が提供できるよう、日々学びを深めております。

スタッフ一丸となって患者さん個々にあった看護や介護を考えています

療育指導室からのお知らせ

東西１階病棟では７月11日に合同サマーフェスティバルが行われ、ボランティアの方々による和太鼓や篠笛の演奏、スタッフによる盆踊りで夏の雰囲気を味わいました。また、西２階病棟では６月27日、東２階病棟では６月29日に夏のお楽しみ会が行われました。ゲストによる二胡とキーボードのミニコンサートや、スタッフによるダンスなどで会場は盛り上がりました。

サマーフェスティバルの様子

医学コラム

鈴鹿病院は三重県の難病拠点病院です

難病拠点病院と神経難病

鈴鹿病院は、三重県の難病拠点病院となっています。今回は難病拠点病院について具体的なお話をします。また、当院の立場から「難病」は「神経難病」を指す言葉として使わせていただきます。

三重県には「三重県難病医療連絡協議会」という組織があります。名称は少しずつ異なりますが全国の各都道府県に同様の組織があって、地域の難病対策にそれぞれ取り組んでいます。この「三重県難病医療連絡協議会」では県内に「難病拠点病院」と「難病協力病院」を組織しており、「難病拠点病院」は、高度の医療を必要とする難病患者さんの入院相談や病院間の連携、研修会開催などの役目があります。「難病」とは、昭和47年に厚生労働省の難病対策要綱の中に１）原因不明、治療方針未確定でかつ、後遺症を残す恐れがある２）経過が慢性にわたり、単に経済的な問題のみならず介護などに人手を要するため家族の負担が重く、また精神的にも負担が大きい疾病と定義されています。「神経難病」とは何かというと具体的にはパーキンソン病や、筋委縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症などの神経変性疾患や、多発性硬化症などの脱髄性疾患、重症筋無力症などの自己免疫性疾患に分類されるものなどがあります。

根本的な治療法や原因が解明されて治療ができれば難病も、未来においては難病で無くなります。是非そうなって欲しいと思います。そのためには疾病の研究をしなくてはいけません。こうした状況の中で国も難病対策に取り組み、近年では指定難病（医療助成の対象とする疾患）を増やしています。

当院は拠点病院として神経難病の患者さんの長期療養入院や、短期のレスパイト入院（ご家族の介護の休憩のため）、検査入院などを行っています。窓口は「地域医療連携室」が担っていますので、お役に立てそうなことがあれば、是非相談してみてください。よろしくお願いします。

（脳神経内科医長　木村 正剛）

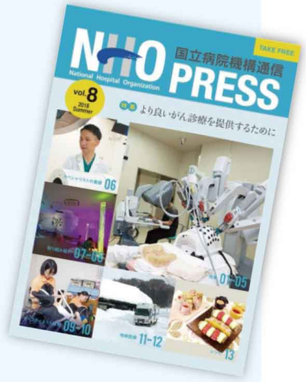
NHO PRESS 国立病院機構通信

National Hospital Organization

第８号発行しました

http://www.hosp.go.jp/nho_press.html

「NHO PRESS」で検索　NHO PRESS　検索



鈴鹿病院は、国立病院機構（NHO：National Hospital Organization）という全国142の病院からなる国内最大の病院ネットワークの病院です。国立病院機構（NHO）という病院ネットワークが、どのようなグループでどのような活動をしているのかを紹介する『NHO PRESS～国立病院機構通信～』を発行しています。地域医療連携室に設置していますので、ぜひご覧になってください。

なお、ホームページに最新号と過去のものを掲載していますので、そちらもぜひご覧になってください。「NHO PRESS」で検索してください。

名誉院長の部屋

名誉院長　小長谷 正明

杖つきツタン

ツタンカーメンというと、古代エジプトーのハンサムな少年王（ファラオ）というイメージですが、彼の彫像やレリーフをよく見ると、しっくりしません。若いはずなのに杖をついている。発掘直後に撮られた写真では、杖や杓を持ったツタンカーメン像が何体も並んでおり、顔だけが少年の老人が行列しているようです。

古代エジプトでは，杖は権威の象徴なので、ツタンカーメン像が杖をついていてもなんの不思議はありません。しかし、彼の墓の副葬品には杖が130本もあり、豪華な錫杖だけではなく、すり減った杖が何十本もあります。権威の象徴や趣味の杖収集とは考えにくく、きっと自分で使ったものでしょう。

ベルリンの博物館にある『庭園の逍遥』という、鮮やかな彩色壁画（レリーフ）では、彼はハスの花束を差し出す王妃に歩み寄っており、古代の若いロイヤル・カップルの様子が微笑ましい。ですが、彼は右の脇の下に杖を立て、右足にかけられた体重のバランスをとっています。左足は曲げられ，つま先を右足首に絡ませていて、障害をうかがわせるのです。

ツタンカーメンのミイラのＸ線CT撮影では、左下肢は内反足で、第２および第３中足骨の成長点が壊死する骨端症という病気でした。悪い左足をかばって歩くために、右は扁平足です。やはり、彼は杖が必要な少年だったのです。（外にも様々な障害が明らかにされ、謎と言われた死因も、落馬による大腿骨骨折とその後の敗血症が明らかになりました。また、DNA解析では、何代にも亘る濃厚な近親結婚の子であることが分りました。）

このように、杖は古代からの、一番古い医療器具かもしれません。古代エジプトでは、王様だけではなく、庶民のポリオ（小児麻痺）少年が杖をついている壁画もあります。わが国の古代の英雄日本武尊も、東国から大和に戻る途中に足の力が萎えて杖をつくようになり、東海道（現国道１号線）の四日市追分近くの“杖つき坂”の由来となっています（なお、尊は当鈴鹿病院の直前で薨去）。洋の東西を問わず、杖は使われ続け、かくいう僕も、整形外科的なことで２度ほど杖にお世話になっています。医者は自分の体を壊すと、患者さんが分かるといいますが、その都度、こういう不自由があるのだな、あの患者さんの嘆きはこういうことなのかと、認識を新たにしました。

最初は、2013年秋に国際学会でウィーン滞在中に、椎間板ヘルニアによる間欠性歩行でした。車椅子のお世話になり、しびれて痛む足で立って、（英語で）20分ほど講演したのですが、車椅子は乗っているより、自分で押している方が痛まず歩きやすいことを発見しました。前屈みになると、脊髄からの神経が通る孔の間隔が開き、圧迫が減るのです。患者さんや高齢者の方々が使う歩行車（以前は乳母車）の有効性を実感しました。

そこで、ウィーンからの帰りは、空港や駅では車椅子に乗ったり、スーツケースを押しながら歩き、しみじみとバリアー・フリーの有り難みを感じました。江戸時代の街通りの賑わいを写した『熙代勝覧』という絵巻には、台車に座って両手の棒で漕いでいる侍が描かれていますが、道路舗装もない時代で、きっと難儀したことでしょう。

２度目はこの夏で、飼い犬のシェパードとの散歩中に左足首を捻挫しました。ツタンカーメンと同じで、反対側の右手で杖をつき、サポーターで左足首を固定すると、かなり歩きやすくなりました。サポーターや装具を使った固定術も、古くからの治療法なのです。

そして、医者として勉強になったことは浮腫、つまり、むくみです。骨折などの怪我だけでなく、脳卒中などでの麻痺した手足や、腎臓や心臓などの内科疾患でも起こります。まず、急激に起こる浮腫では皮膚がパンパンに張ってミリミリと痛く、また、拡張したリンパ管に沿って熱い圧痛ラインが走ります。脳卒中で麻痺した手足を痛がるのは、これらの為かと実感しました。中枢に向かって軽くマッサージをしてやると、浮腫が引いてきて痛みが和らぎ、さすると、“痛いの痛いのは飛んで行く”のです。

次に、腫れた左足を上にして寝た晩、夏だというのに１時間おきのトイレで、薄い尿がかなり出ました。計算すると2,000㎖以上も水分を排出していて、左足の痛みは減り、腫れもかなり引きました。足に浮腫がある患者さんが、夜間頻尿でその都度の介助が問題とのことですが、体験的には納得できる話です。

ともあれ、患者となって、改めて杖をはじめとする古典的・保存的治療法の有り難みを感じ、患者さんの訴えの意味なども再認識しました。

王妃から花束を受けるツタンカーメン王

地域医療連携室だより

鈴鹿病院へ長期入院を希望される患者さんへ

鈴鹿病院は三重県の難病拠点病院として神経難病の患者さんの長期療養入院やレスパイト入院の受け入れを行っています。今回は鈴鹿病院へ長期入院を希望される患者さんに対して、当院よりお願いしたいチェックポイントをご説明させていただきます。

1 事前にかかりつけの先生に十分ご相談ください。長期入院希望のため外来受診される場合は、診療情報提供書（紹介状）をかかりつけの先生に書いてもらい、当院地域医療連携室（下記連絡先）に送付してください。なお、診療情報提供書のお返事は情報提供元の先生宛へ返書させていただきます。

2 患者さん本人が来院され医師による外来診察を受けてください。患者さん本人が来院したうえで医師による外来診察を受けてください。どうしても患者さん本人が鈴鹿病院に来られない場合は、法定後見人がお越しください。

3 長期入院のご意志を診察時に明確に伝えてください。患者さん本人が今後どのように生活していきたいのかしっかりとご意志を固めてください。そして、そのご意志を診察時に伝えてください。なお、様々な手段を用いても本人が意志表示できない場合は、法定後見人が本人に代わってご意志を伝えてください。

4 まずはレスパイト入院の定期的なご利用をお勧めします。当院の入院環境に慣れていただくために最初から長期入院ではなく、まずはレスパイト入院のご利用をお勧めします。レスパイト入院と在宅生活を繰り返しながら患者さんの状態に応じて長期入院を考えていただければと思います。

まずは下記連絡先までお問い合わせください。今後とも鈴鹿病院をよろしくお願いいたします。

国立病院機構　鈴鹿病院　地域医療連携室
〒513-8501 三重県鈴鹿市加佐登3丁目2-1 TEL：059-378-1321 FAX：059-379-6670

昭和・平成スポーツオタクコラム　ー番外編ー

「昭和から平成へ、谷繁元信捕手／監督」

副院長 スポーツドクター　安間 文彦

これまでに落合博満さん（64歳）（平成16-23年にドラゴンズ監督）と高木守道さん（74歳：平成24-25年に同監督）について書いたので、引き続き平成26-28年にドラゴンズ監督を勤めた谷繁元信さん（45歳）をふりかえってみましょう。テーマは「彼が選手で成功したのに、監督で成功しなかったのはなぜか？」です。

谷繁さんは「無事、これ名馬」と昭和から平成に活躍した名捕手です。昭和63年、江の川高校（島根県）からドラフト１位で大洋ホエールズ（横浜ベイスターズ）に入団、平成10年のリーグ優勝と日本一に貢献しました。平成14年にドラゴンズに移籍し、山田久志監督の２年間は３位と２位、落合監督の８年間では４回のリーグ優勝（日本一１回）の屋台骨を支えました。高木監督の下では１年目こそ２位でしたが、２年目に４位とBクラスに転落しました。監督を継いだ谷繁さんは、平成26年から選手兼任で２年、専任で１年チームの指揮をとりすべてBクラス（４位、５位、６位）でした。

谷繁捕手は、キャッチャー・ボックス（扇の要のポジション）からみた一球、一打席毎のバッターとその背景の映像、一試合分（約120球）の配球を記憶したそうです（谷繁流キャッチャー思考、日本文芸社、2017年）。谷繁さんはトップ・アスリートであり続けただけでなく、落合監督のドラゴンズ時代にキャリアのピークを迎え、その頭脳に整理された膨大な映像、数字、選手データを駆使して、ピッチャーのみならず野手全員を、扇の要で支配するようになりました。ひとつのアウト、否、ひとつのストライク（あるいはボール）を得るのに、質の高い経験智の積み重ねがあったと思うのです。ですから、落合監督は谷繁捕手を「いなくなったら最も困る選手」と評価しました。

今回のテーマに対する私なりの答えは「落合監督には谷繁捕手がいたが、谷繁監督には谷繁捕手がいなかった！」です。不幸にも、谷繁さんの監督時代に始まったドラゴンズの記録的な低迷が、森繁和監督の現在も続いています。名将には運、とくに名捕手と出会いが必要です。谷繁さんが、次に現場に復帰するときはどうか？　それは「神のみぞ知る---」です。

捕手の成績ー27年間：3021試合*、8774打数2108安打、打率 0.240、打点1040、本塁打229本、連続シーズン安打27年*、連続シーズン本塁打27年*、規定打席に達しての最低打率５回*（*はプロ野球記録）。

監督の成績ー３年間：391試合171勝208敗11分、勝率0.451。

■外来診察担当表 （2018年10月１日現在）

	月	火	水	木	金
脳神経内科	小長谷	酒井 木村	久留 南山	小長谷	久留
内科	野口	落合	安間 （循環器内科）	安間 （循環器内科）	棚橋 （循環器内科）
小児科		予約			予約
整形外科		田中 （装具外来）			田中
リハビリテーション科					田中
皮膚科		予約			
歯科	若林	黒原（午後）		留奥（午後）	
禁煙外来	野口			安間	

- 外来受付は８:30～11:00、診療開始は９:00～です。
- 歯科は身体障害者の方に限ります。
- 装具外来は火曜日の午後１:30から整形外科で受付いたします (あらかじめ電話予約のうえお越しください)。
- 小児科外来は担当医とご相談のうえ、ご予約ください。
- スギ花粉症でお悩みの方を対象に舌下免疫療法を実施しています。（月曜日）
- 土曜日、日曜日、祝祭日は休診です。

■交通案内

- ＪＲ「加佐登」駅より徒歩８分
- 東名阪「鈴鹿」I.C.より車８分
- 近鉄「平田町」駅よりタクシー15分
- 鈴鹿市西部地域コミュニティバス
  椿・平田線「26加佐登神社」下車すぐ

■編集後記

ロボットスーツＨＡＬ導入後、ＨＡＬによるリハビリ目的の入院件数が増えてきました。「歩行能力が回復した。」「リハビリをしたことで日常生活上の注意点に気づけた。」「いい状態の歩行を維持できるようになった。」など等、患者様から嬉しい声を聴くことも増えました。患者さんのもてる力を維持・向上することが、よりよい生活につながるように支援させていただきます。

（地域医療連携係長　藤谷 和美）

独立行政法人国立病院機構　鈴鹿病院

〒513-8501 三重県鈴鹿市加佐登３丁目２番１号　Tel 059-378-1321㈹　Fax 059-378-7083　http://www.hosp.go.jp/~suzukaww/

平成30年10月発行